「曽祖父夏目漱石とその女婿松岡譲」

1　曽祖父夏目漱石――――系図から言及（資料１）雛子卒死１歳半

① まずは、系図から漱石とわたくし野尻はるひとの関係をご説明したいと思います。系図１をご覧ください。　　夏目漱石には５人の女の子と２人の男の子がおりました。末子の雛子は幼くして亡くなり、次女の恒子も結婚後３人の子供を残して若くして亡くなっておりますのでわたくしは会っておりません。その他は面識がございます。長女の筆子が私の祖母で、筆子の夫が後半でお話する松岡譲です。松岡譲と筆子には６人の子供がおりまして長男の聖一がわたくしの父です。次女則子は幼くして亡くなっております。少し、わたくしのおばたちの話を致しますね。長女の明子伯母は漱石の初孫に当たりまして漱石未亡人の鏡子に大変かわいがられました。東京の雙葉学園に通っていたのですが、そこで北里柴三郎のお孫さんと大変仲良しだったんですね。北里柴三郎は「近代日本医学の父」と言われる微生物学者で、（令和６年 2024 年）今年、千円紙幣の肖像に使われることが決定している人物です。なお、この明子伯母は「漱石の孫と北里柴三郎の孫で雙葉学園の学年びりを争うという」逸話を残した人でして・・・・・・わたくしの大好きな伯母だったんですが、残念なことに比較的若いうちに亡くなってしまいました。次女の陽子・マックレインは勉強好きのまじめな人で渡米し、向こうでオレゴン大学の名誉教授にまでなりました。専攻は比較文学です。漱石関係の著書も何冊かあります。新児叔父はNHKの記者で最後は今世間を騒がせている日大の教授でした。さて、父の一番下の妹の末利子叔母の話に移りますが、彼女にはわたくしは子供のころから非常に世話になっていましてよく彼女に連れられて祖父母の住む新潟県長岡市に向かった思い出があります。今でもよく会いますが、とても面白い人です。今の肩書はエッセイストで何冊も本を出しています。牛久図書館にもあると思います。蛇足ですが、一昨年、テレビ朝日の「徹子の部屋」に出ておりまして、ご覧になった方もいらっしゃるかもしれません。

② 次に末利子の夫の半藤一利　についてお話しますね。　半藤とは若い頃、編集の仕事を一緒にしていました。当時、半藤は週刊文春の編集長を経て、文藝春秋の編集長になった時期で色々面白い話もあるんですが、そちらはまた機会がありましたらお話ししたいと思います。少しだけお話ししますと、なかなかの才人で日本舞踊の名取です。また、当時女性に大変人気がありまして文藝春秋社内に「文春はんちゃんぎゃるず」というファンクラブがありました。そのお姉様方も今や皆さま 80 代から 90 代かなぁと思います。半藤叔父の書斎には、今でも紺地にぶんしゅんはんちゃんぎゃるずと白で染め抜いた半纏がぶら下がっています。

半藤叔父は東京下町育ちですが、母方の実家は下妻（しもつま）でして、疎開で一時茨

城県立下妻一高の前進である茨城県立下妻中学校に籍を置いていたことはあまり知られておりません。後にわたくしが牛久に越してきてからのことですが、半藤叔父が筑波山を紫峰山と呼ぶことや、関東のパワースポットとして有名な下妻の大宝八幡宮（だいほうはちまんぐう）のことなどを知っていたので驚いたことがありました。

③ 漱石　　では、前置きが長くなりましたが、漱石関係の話にもどります。

漱石は 1916 年に亡くなっております。漱石の初孫にあたる明子伯母が生まれたのは 1919 年のことです。結局孫の誰一人として漱石にはあっていないんですね。

ただ、私は漱石の妻鏡子にはあっていて葬儀にも列した記憶があるので、彼女については多少は話すことができると思います。

まずは鏡子についてのエピソードを幾つかお話しします。

○『吾輩は猫である』が当たった後、彼女は猫をとても大事にするようになりました。最初は飼っていた猫をあんまり大事にしていなかったんですが、あんまのお婆さんが、「奥様、この猫は全身足の爪まで黒うございますが、これは珍しい福猫でございますよ。飼っておおきになるときっとお家が繁盛いたします」と言ってからクロネコを大事にするようになりました。　私の両親は戦後間もなく夏目家に寄宿していた時期があるのですが、その際に父の聖一が帰りに猫を拾ってしまいまして、鏡子に「飼っていい？」と聞いたそうなのです。そうしましたら、鏡子が「足の裏は黒いかい？」と聞くので「黒いよ」と答えたそうなんですね。結果、猫は首尾よく夏目家に飼われることとなりましたが、実は足の裏は白っぽかったということでした。これは父から聞きました。

○　鏡子と言う人はとても気前がよくて、大ばんぶるまいという表現がぴったりなんですね。漱石の弟子たちには請われるままに半端でない額のお金を貸してやっていたそうなんです。

母からきいたのですが、戦後、日本中が窮乏していたころ、そろばんをはじきながら「A さんに何円，B さんに何円、C さんに何円、あれを返してくれたらねぇ」なんて言っていたらしいんです。ABC には、それぞれ漱石の高名な弟子（門下生）の名前が入ります。

とにかく非常に鷹揚でやさしいところのあった人で、母は「ばんっとしていいおばあちゃまだったと言ってました。漱石にはお兄さんがいまして、あまり裕福ではなかったそうです。漱石は生前から時々金銭的援助をしていたんですが、鏡子は漱石の死後も援助を続けてお兄さんの娘、姪をちゃんとお嫁にだしてやってるんです。

○一方、鏡子は漱石の妻として非常に評判が悪いんですね。いろいろなひとにさんざんなことを言われています。奥さんが鏡子でなかったら漱石はもっといい作品を書いたかもしれないとまで言われています。　漱石の弟子（門下生）の野上豊一郎の妻で作家の野上弥生子という人がいるんですが、彼女は（大正１２年 10 月９日の）日記に鏡子のことを「かわいそうだけれども、要するに自分の愚と浅薄の報いを受けるのである」と誠に辛辣な調子で書き綴っています。また、「大切なのは、美しいのは、貴重なのは、知

性のみである」と書いています。野上弥生子は当時の知識人で、とても聡明な女性ですがわたくしにはちょっと冷たい感じがします。話がそれるんですが、弥生子の実家は九州大分のフンドーキン（現小手川酒造）というところで、わたくしはそこの醤油と味噌をつかっていますが、とてもおいしいと思います。添加物が入っていないんですね。この近辺ではつくばのロピアで扱っています。

○なお、忍法帖で有名な作家の山田風太郎が、『死言状』と言うエッセイ集を出しているんですが、その中で、鏡子のことを単純に悪妻じゃないのではないか、弟子たちは木曜会の後、飯を食って、金を借りて泊まる、そんなに悪い、いやな奥さんだったらこういう行動をとるかと書いています。
因みに先の木曜会ですが、毎週木曜日に漱石を慕う若手文学者や教員時代の教え子が漱石宅に集まって様々な議論をした会合のことです。
○　木曜会の面子としては
東京帝大の教え子、小宮豊隆、鈴木三重吉、森田草平、野上豊一郎、阿部能成（あべよししげ）、晩年に芥川龍之介、久米正雄、松岡譲らがおります。

鏡子と言う人は確かに、野上弥生子が指摘したように決していいところばかりといった人ではありませんでしたが、漱石の遺体の解剖やデスマスク（元々は森田草平の発議）を作らせるなど、当時としては珍しい豪胆なところのある女性です。遺族は、鏡子だから漱石と暮らせたんだろうと言っています。

では漱石についてお話ししましょう。
○まず、私と漱石との接点からお話しますね。
会っていないので、祖母の話の断片や、あとは文献で想像するばかりの人ですが、いまや神格化されていてあまりに有名なので、普通のひいおじいさんとしての親しみがわかないのが残念です。鏡子の場合は会っているので、「聖ちゃんの子供かい？かわいいね」などと言ったのをおぼろげながら覚えていて、まだ懐かしみがあるんですね。聖ちゃんとはわたくしの父聖一のことです。父は2歳半くらいまで、夏目家で鏡子と一緒に暮らしていました。
接点を強いてあげるとするならば、わたくしは漱石の通った小学校と中学に通いました。小学6年生の時にいきなり転校させられたんですね。
行った先は東京都千代田区立錦華小学校、錦に華やかと書きます。　転校した年がちょうど創立 100 周年だったので卒業時に漱石のレリーフ入りの額をもらった覚えがありまして、それはまだ家にあります。小学校の思い出は、正直よくないです。というのは転校したその日に担任の先生が、「松岡さんは夏目漱石のひ孫にあたります」と給食の時間にわざわざ披露して下さったせいでいじめられた嫌な記憶があるせいなんですね。

ある時は家庭科室に女子全員に、10人くらいですか？閉じ込められまして。ああ、女子は怖いなぁと思った次第です。
中学校は同じく千代田区立一橋中学校。漱石も通った学校ですが、漱石は漢文がやりたくて途中で二松学舎に転校しているんですね。最後までは通っていません。両親は漱石の通った学校をわたくしに見せたかったのかもしれないです。
○次にお札の話をいたします。　漱石が千円札になった時のことです。
わたくしは、有名人がお札になった時、日銀は通し番号の最初の方を遺族に譲与することを初めて知りました。祖母の筆子はそのころ、末の娘の末利子のところ【半藤家】に引き取られていました。たまたま、主人とわたくしが祖母を訪ねたときに、ナンバー000001のお札が小さな額に入れられて置いてありました。お札の番号の1番を見たのは後にも先にもその一度だけです。
数年前に漫画評論家で元学習院大学教授の夏目房之介が、漱石山房記念館の講演会で漱石のお札に関する話に触れていました。房之介の父親は漱石の長男純一です。夏目純一は日銀から譲与された新札のナンバーが5番だったので、「なんで5番なんだ？」とおこっていたらしいんですね。長女の筆子のお札が1番だったことから、わたくしはその時に日銀に男女差別はないんだと思った次第です。なお、紙幣の頭文字は一桁か二桁で多数の組み合わせがありまして、この時半藤宅で見たお札が正真正銘の漱石紙幣の一番目だったかは定かではないんですが。たとえば、A000001Aではなく B000001Aとか。末利子叔母に1番札いまどこにあるの？と聞いたら、「その辺にある」という返事でした。

○　次に祖母筆子と漱石についてお話しいたしましょう。祖母は先ほど少し触れたように、夫の松岡譲が亡くなった後、末娘の半藤末利子のところに引き取られておりまして、わたくしも結婚前はよく会いにいっていました。
半藤末利子叔母宅で写真の整理を手伝った際には、漱石の写真ばっかりで「漱石ばっかりじゃない」と言うと「当り前じゃない」といって祖母が笑っていたのを思い出します。写真は現在、漱石山房記念館や近代文学館にほぼ寄付されていると思います。なお、漱石は時折精神の変調をきたすことがあり、そういう時は家族へのDVなどもあったので、祖母は生前漱石について怖いイメージしかないと言ってました。ある時など、兄弟全員タンスの上に立たされて怒られたそうです。なんか変ですよね。きっと、漱石の頭の調子がおかしい時だったんだと思います。　残っている漱石の写真を見ましても、気難しい、怖いイメージが強い漱石ですが極めて家庭的で優しい一面もあるんですね。漱石は修善寺の大患（漱石が修善寺で療養中に大量吐血し、危篤に陥った事をいう）の際に、娘たちにあててとても優しい手紙を送っています。資料2をご覧ください。　ちょっと長いんですが読んでみます。
漱石にとてもやさしい一面があることがお分かりいただけたと思います。因みにここで

御祖母様というのは鏡子のお母さんのことです。中根豁子（かつこ）といいます。また、鏡子の父親は中根重一（なかねしげかず）といいまして、明治時代の医師で官僚、貴族院議院の書記官長などを務めた人です。

○　では、ここで私にとって曽祖父の漱石とはどんな人かといったことについてお話したいと思います。

漱石全集は家に全巻ありますが、全てを読んだわけではありません。取り分け書簡集などは大変おもしろいんですが読み切れておりません。先ほどの家族への手紙や正岡子規宛てのものなども入っています。実は漱石は手紙魔で、（弟子の森田草平への手紙に）「人に手紙を書く事と人から手紙をもらう事が大好き」と書いています。残っている手紙だけで（22歳から49歳まで）2500通を超えるそうです。

さて、わたくしは、若い頃に有名作品は一通りは読んだんですが、本当によく理解して読んでいたとは思えないんですね。

たいていの方がそうだと思いますが、わたくしも『坊っちゃん』や『吾輩は猫である』や『倫敦塔』あたりから読み始めましたので、後に『草枕』、『虞美人草』、『三四郎』、『それから』『門』、『彼岸過迄』、『行人』、『こころ』、『明暗』その他読み進めまして、あまりに男女間の話が多いのでびっくりしました。若いころは私が言うのもまことに僭越ですが、文章がうまいとか、登場人物たちの心の動きを微に入り細に入り、悪くいうとねちねちとよくぞここまでしつこく書けるものだといった印象しか持たなかったんですね。ところが、その後大分経って読み返してみますと、今度はとりわけお金にまつわる話や世の中の矛盾といったモチーフを扱った話が実に多いことに気が付きました。自伝的色彩が濃いといわれる『道草』には教師として働く漱石のところに、かつての養父や腹違いの姉や、更には落剝した妻の父親まで金を無心にきたことが書かれています。漱石は生まれてすぐに里子に出され（4か月）、いったんは実家に戻るも、その後また1歳から9歳まで養子に出されるなど、あまり恵まれたとはいえない子供時代を送っています。こういったことも作品に影響を与えているのだと思います。漱石は『こころ』で「人間は金が絡むとみんな悪人になる」、言い換えると「倫理観はエゴイズムの前に崩壊する」といっているんですね。また『野分』の中で「国家主義も社会主義もあるものか。ただ、正しい道がいいのさ」と書いているんです。つまり、忖度なしにいいものはいい、悪い物は悪いと言い切っているんです。これらはほんの一例ですが、こんなところも漱石が現代でも決して古くなく、根強い人気のある一因なのではないかと思った次第です。

漱石は本当に多岐にわたる作品を書いているので、読み返してごらんになると今現在のご自分の好みの作品に会えるかもしれません。超有名作品だけでなく『野分』、『二百十日』、『倫敦塔　幻影の盾』の中の短編などもおもしろいと思います。

月並みですが、資料3として『坊っちゃん』の最後の場面をあげておきました（1.8）。読みますね。因みに、清は坊ちゃんをかわいがっている下女（雑事をさせるために雇った女中）です。

ホロっとさせるところがホントにうまいなぁと思います。『吾輩は猫である』や『野分』の最後のところもいいですよね。漱石の話はこれで終わりますが、わたくしは曽祖父としての漱石との懐かしい、温かい思い出が皆無なのはまことに残念ですが、偉大な作家としての曽祖父を持ったことを今となっては大変嬉しく思っております。

さて、次にわたくしの祖父松岡譲についてお話ししたいとおもいます。漱石の長女筆子の結婚した相手で、漱石は岳父となります。なお、女婿とは単に娘の夫の意味で文章語です。

松岡譲は、漱石最晩年の弟子（門下生）の一人で、今ではご存知の方も極めて少ないかと思いますが作家です。また、有名な田園テニスクラブの創設や田園コロシアムの誕生に深く関わっていたことは全く知られておりません。テニスは本当に上手だったようです。「テニス・ファン」と言う雑誌を戦前に刊行していました。小説家としての代表作は『法城を護る人々』という小説です。東京帝国大学系の文芸同人誌第四次『新思潮』のメンバーで同人仲間には芥川龍之介、久米正雄、成瀬正一、菊池寛がおります。祖父の作家としての人生はそこからスタートしています。

○　生家など　　松岡譲の略歴を申し上げますと、

生家は、新潟県長岡市の真宗大谷派（東本願寺）の末寺「松岡山（しょうこうざん）本覚寺」です。

明治二十四（1891）年九月二十八日生まれで幼名は不二丸といいます。

元々の名前は「善譲」ですが、後に「譲」一文字に改名しています。

○明治四十三（1910）年、第一高等学校（旧制一高）、今の東京大学教養学部に入学して、そこで菊池寛、久米正雄、成瀬正一、佐野文夫（戦前の日本共産党の幹部）などと交流します。

○　大正三（1914）年、東京帝国大学文科入学、翌年本科に転じ、哲学を専攻、同年2月に山本有三、山宮允（さんぐうまこと、詩人、英文学者）、豊島与志雄（小説家、翻訳者、法政、明治の教授）、久米正雄、芥川龍之介、成瀬正一(フランス文学研究者、九州帝国大学教授)、佐野文夫、土屋文明（ぶんめい、国文学者、万葉集研究家）、菊池寛と同人誌第三次『新思潮』を起こします。

○　大正四(1915)年、久米、芥川の手引きで漱石山房の木曜会に通うようになります。この時期漱石から「越後の哲学者」というニックネームをつけられたといいます。

○　大正五（1916）年、芥川龍之介、久米正雄、成瀬正一、菊池寛と第四次『新思潮』を刊行します。

同年大正五年の十二月に漱石は死去します。

ここで、後のお話をする前提として松岡譲の生い立ちを簡単に述べる必要があります。

仏教の盛んな地方の寺院の跡取りに生まれたということで、彼は将来の院主として大切に育てられますが、成長するに連れて、寺院の生活が実際のところ、仏教本来の精神とは大きく乖離していて、単なる金儲けの手段に過ぎないのではないかと考えるようになります。その結果、従来の寺院仏教を頑なに護る父親と激しく対立するようになります。大学卒業後（大正六【1917】年、東京帝国大学文科大学東洋哲学専修を卒業）、一時新潟に戻りますが、生家の寺を継ぐようにと厳命する父親に徹底的に逆らった挙句、絶縁に近い状況で再上京します。これがちょうど松岡譲が大学を卒業したころまでの背景となります。

○　この頃、小説は書いていましたが、大した収入はないわけです。同情した夏目鏡子の好意で祖父は早稲田の故夏目漱石宅に子供達の家庭教師として入ります。

○　そして大正七（1918）年、漱石の長女筆子と結婚したわけなんですが、この結婚は万事がめでたし、めでたしと言うわけではありませんでした。といいますのは、第四次『新思潮』の同人で松岡譲の友人でもあった久米正雄も筆子との結婚を望んでいたという経緯がありまして、結局は当時としては珍しく筆子がはっきりと久米ではなく松岡が好きだという意思を示したので松岡譲との結婚に至ったといういきさつがあるんですね。結婚に際しては、久米だけでなく漱石の弟子たちの中にも賛否両論色々あって祖父は本当に大変だったようです。さらに解説を加えますと、松岡譲は漱石最晩年の弟子（門下生）の一人で当時はまだ駆け出しの作家にすぎない訳です。その若造が漱石の娘と結婚して、故夏目漱石宅に留まるということは、単なる久米の失恋事件にとどまらず、一部の漱石の弟子や友人たちのやっかみや嫉妬を引き起こしたことは否定できません。このごたごたは結婚後も長く尾を引き、後に大正文壇史に残る「破船事件」へと続いていきます。

1ではここで破船事件についてお話ししましょう。破船事件とは大正文壇史に残る文壇ゴシップで漱石の『こころ』を地で行く事件ともいわれます。漱石の『こころ』はごく単純にいうと物語の語り手である「私」が先生と呼ぶ主人公と彼の大学の友人Ｋと後に先生の奥さんになるお嬢さんとの間の三角関係の物語です。結果的に失恋したＫは自殺します。また、その後先生も奥さんを残して死を選ぶという話です。Ｋがなぜ自殺したか、また何年もたって先生もなぜ死を選ぶに至ったかについては、これまで多くの評論家や作家が作品のモチーフに取り上げてきましたのでここではこれ以上言及することは控えます。

さて、松岡譲と筆子の話に戻りますが、譲と筆子の結婚で久米正雄は失恋します。なぜか？筆子が松岡を選んだから。『こころ』にあてはめれば、譲＝先生で、　久米＝Ｋとなりますね。

ただ、失恋した久米のとった行動はＫと大きく違いました。久米は自身の失恋体験をモチーフに所謂「失恋物小説」を書きまくりました。

その中で、筆子と思しき娘は移り気であざとい女に、松岡譲と思われる男も陰気で抜け

目がなく、決して良くは描かれておりません。久米の一連の失恋物小説の代表的なものが『破船』といいまして、それでこの大正文壇史に残るゴシップ事件を「破船事件」といいます。
結果はですね、久米は世人の同情を買い、一躍流行作家となっていきます。
一方の松岡は「友人の恋人を奪った卑劣漢だの、世間から色々言われた挙句に文壇からも距離を置くこととなりましたが、頑ななまでに沈黙を守りました。
○　松本清張が、『形影　菊池寛と佐佐木茂索」と言う本の中で「破船事件」に言及しています。(菊池寛は文藝春秋社の創業者です。同社は戦争協力のため解散されましたが、佐佐木茂索ら旧社員が、その後株式会社文藝春秋新社を設立しました。)（資料４）をご覧ください。松本清張は次のようにのべています。「松岡譲が文壇から去ったのは、彼が夏目漱石長女筆子と結婚したため、筆子に思いを寄せていた久米正雄が失恋し、その久米に芥川、菊池が友情から同情したことに原因する（P.180,l.11）・・・・・・・久米がこのように自分の失恋小説をつづけざまに書けた理由の一つは、松岡譲がそれに反駁するような小説なり随筆を何も書かなかったからである。《彼（久米）は恋の敵役松岡譲の沈黙をいいことにして、この事件を書きなぐった》と文学辞典も記す（「日本）近代文学辞典」」。(P.181,l.3)
○　では松岡譲は何故、沈黙を守ったのでしょうか？
１つには夏目鏡子は男手のなくなった夏目家に祖父が同居することを強要しました。当時、漱石の長男の純一はまだ９歳でした。まあ便利に使おうと思ったところも正直あると思います。その際、鏡子にプライベートなことは決して書いてくれるなと祖父はきつく言われたそうです。漱石は『道草』の中で鏡子と思しき女性に大分手厳しい表現を使っています。ひどいヒステリーだとか俗物だとか書いてます。鏡子はこのうえ、自分も含めて家族のことを書かれるのは苦痛だったのだと思います。
２つ目には松岡譲がこの時期、自身の結婚に関して何の言い訳も反駁もせず、沈黙を守ったのはまずは譲が寺院の子であるという出自からくる為人（ひととなり）によるところが大きいように私には思えます。恋愛・結婚という個人のプライバシーを世間に切り売りするなど耐えがたかったことでしょうし、かつては親友であった久米への複雑な胸中も察するにあまりあると思います。また、何よりも久米の執拗な失恋物小説に対抗しての泥仕合などはたまらなくいやだったのではないでしょうか。沈黙を守った数年後、松岡譲は創作活動を再開し、代表作と言われる『法城を護る人々』を発表しました。
2では、今から100年前大正十二（1923）年に刊行された『法城を護る人々』とはどんな本なのでしょうか？？？
まず、法城とは大無量寿経というお経の中の言葉で、意味は仏法が諸悪から護ってくれることを城に例えていう語で、宗派、寺院の意もあります。元々は、大正六（1917）年に『文章世界』十一月号に同名の短編小説として発表されてかなりの評価を得たのです

が、六十枚と短く、作者としてはよほど書きたりなかったと見えます。六年後に四千五百枚の長編小説に開花させました。元の短編は混同を避けるために後に『護法の家』と改題されています。仏教や寺を扱った小説なので難しい、堅苦しいというイメージをお持ちになるかもしれません。確かに、難読漢字や仏教用語に辟易するところもありますが、内容的には大正時代の青春小説と言った一面もありまして、面白く読めると思います。私自身はヘルマン・ヘッセの小説を連想してしまいました。

○　梗概

ごく簡単に梗概をお話ししますね。

主人公の宮城円泰は雪国の真宗大谷派の末寺光明寺の長男として出生(しゅっしょう)しますが、長ずるに連れて、信仰だ、教義だ、伝道だと勿体をつけている寺院の生活が、結局は拝金・金儲け主義の経済活動にすぎないという考えに至り、寺を継ぐことを断固拒絶します。その結果、旧来の寺院生活を頑迷固陋に護る父親との間に壮絶な対立が生じます。ここまでは、松岡譲の生い立ちそのものですね。其れで自伝色が濃いなどと言われることがあります。ただ、自伝的要素は徐々に薄まっていきます。

中巻では、様々な宗教人、伝道者が登場して法座や座談会を通じて多様な法論が闘わされ主人公が揺れ動きます。しかし、宮城を心から満足させるような人物は現れません。

下巻は、京都における五十年に一度の宗祖の大御恩忌のルポルタージュといった体で始まり、真宗寺院とそれに付随する一切が徹底的に批判されます。大法要の喧騒の後は、過去に登場した宗教家達の行く末や上巻から続く親子の対立のその後が描かれていきます。

○　『法城を護る人々』は版を重ね、当時のベストセラーとなりましたが、文壇や宗教界からは徹底的に無視されたようです。

○　では、文壇と仏教界はなぜ無視をきめこんだのでしょうか　？？

まず文壇はといいますと、いまや売れっ子作家で文壇の寵児となった久米に忖度して無視をきめこんだともいわれています。松岡譲はその後も文壇とはあまり縁が無く、ついには非文壇作家などとも言われるようになります。

では、宗教界はどうだったかというと、

松岡はこの小説で、当時絶大な力を持っていた真宗教団の金まみれの体質やその矛盾を徹底的にあばいてみせました。結果、『法城を護る人々』は地方の保守的な僧侶達を憤慨させ、それだけでなく若い人達（青年僧たち）に寺院改革本山改革の刺激をあたえたため、仏教界は黙殺と逃避という方針を取らざるをえなかったということです。つまり、下手に批判や非難をすることで、藪をつついて蛇を出すといった事態を避けたのではないかと思われます。当時から真宗教団のお金にまつわるスキャンダルは多かったんですね。ちょっと説明を加えますと、（田原由紀夫著の『東本願寺三十年紛争』と言う本があるんですが、それによれば、財政乱脈の責めを負って法主（ほっしゅ、ほっす）が退任に追い込まれた句仏事件等、松岡の時代から真宗教団中枢の腐敗ぶりは目に余るものがあったようです。なお、句仏事

件とは「東本願寺第二十三代法主の大谷光演（句仏）が父親から法主を受け継いだ1908年当時、普段の出費過剰に加えて、焼失講堂の再建費や北海道開拓事業費、明治政府への賦課金などで東本願寺は莫大な負債を抱えており、光演は再建のため海外投資などを試みたものの、ことごとく失敗し、さらなる天文学的な負債を抱え込んだ」という事件です。宗教にお金がからむのは今も昔もかわらないようです。）

○　さて、松岡譲は昭和十九（1944）年、米軍の空襲が激化し、東京から故郷の長岡に一家で疎開しますが、当時はネットもない時代です。文筆業を続けるには在京することが必須なのですが、結局、帰京の希望がかなうことはありませんでした。体を壊したこともあり一番窮乏したのが昭和三十年から三十五年頃のことで、昭和三十三年にはほぼ無収入で年を越せなくなり、金を借りるために大事にしていた芥川龍之介からの書簡44通を手放しています。これらは後年叔母の半藤末利子によって極めて高額で買い戻されまして現在では漱石山房記念館に寄贈されております。叔母はいい親孝行をしたと思います。

文筆業は死ぬまで続けていましたが、祖父は戦後徐々に忘れられていき、昭和四十四（1969）年に亡くなりました。わたくしが高校一年の時です。葬儀では同郷の政治家田中角栄から巨大な花輪が届いていたのを覚えています。

3　では、ここで松岡譲のその他の作品をご紹介します。

1　まず、もう一つの代表作と言われる「敦煌物語」についてお話しします。

『敦煌物語』は、松岡譲が中国の敦煌、西域に関する膨大な資料を渉猟して書いた作品で、後に『敦煌』を書いた井上靖に少なからぬ影響を与えています。（資料5を参考になさってください。一部抜粋して読ませて頂きます。（P.32,l.9）「この作品から伺われる松岡譲の敦煌、西域への関心と、その情熱と知識は相当なものであり、そこに視点を当てると、やはり読みだしたらやめられない面白さがある・・・・・・云々」といった次第です。

2　次に、松岡譲が結婚十年後に書いた譲と筆子の結婚縁起ともいえる『憂鬱な愛人』と言う作品があるんですが、こちらは漱石最晩年頃の情景から始まって、松岡と筆子が結婚に至るまでの物語です。もちろん、登場人物たちの名前は変えてありますが、漱石をはじめとする夏目家の人々や弟子や友人たちが数多く登場します。二人の結婚に至る詳細な経緯だけでなく第四次『新思潮』の同人や漱石の古い弟子（門下生）たちとの間の微妙な位置関係も知ることができて興味深い小説です。なお、『憂鬱な愛人』は2020年に株式会社復刊ドットコムより復刊されております。

3さらに、松岡譲には生涯尊敬してやまなかった岳父漱石に関係する著書が数多くありまして、代表的なものには『漱石の漢詩』、『漱石の印税帖』、『ああ、漱石山房』、あと夏目鏡子述、松岡譲筆録『漱石の思い出』などがあります。

『漱石の思い出』は、漱石の精神の変調などを赤裸々に描いているので、漱石を神格化

する弟子（門下生）たちをはじめ多くの人に最初はひどく批判されましたが、今では評価が進み、漱石研究者の必読の書となっています。鏡子の話と『草枕』、『道草』などの作品の内容がシンクロするので漱石ファンにとって興味深い本だと思います。

4　もう一度、松本清張の（資料４）をご覧ください（P.182,l.13）。清張は松岡譲に関してこういっています。「作家の登場や作品の発表は早すぎても遅すぎてもいけない。それには運が作用している。結局、松岡は不遇のうちに死んだ」

この松本清張の評は実に的確で的を射ていると思っておりまして、祖父の松岡譲は決して運のいい人ではありませんでした。なんだかいつもタイミングが悪いんですね。また、死ぬまで真摯に文學と向き合った祖父にとって常に破船事件とセットで語られて、作品で評価されないことははなはだ不本意だったと思います。

嘗て、今東光という作家が破船事件に関連して松岡譲は小説家としての才能は全くない云々といった評価を下している本を読みまして、ああそうなんだとわたくしは思いました。というのは、その時点でわたくしは松岡譲の本を全くと言っていいほど読んでいなかったんですね。が、その後先の『敦煌物語』を読みまして、正直強い衝撃を受けました。今東光の言っていたこととは全く違う印象を受けました。

松岡の作品を読み始めたのはそれからのことですが、私は、日本近代文学史上で、松岡譲の業績が今後正当に位置づけられる事を願っております。

松岡譲は夏目漱石とも芥川龍之介とも全く違った文学世界を構築しました。これを機会に是非とも、その世界に触れて頂きたいと思っております。

なお、松岡譲と久米正雄の評伝がそれぞれ出ておりますのでご紹介しておきます。

まず、松岡関係　『評伝　松岡譲』　元都留文科大学名誉教授　関口安義　小沢書店

『作家・松岡譲への旅』　中野信吉　林道舎

ほぼ忘れ去られた作家に関心を寄せて下さった関口、中野両先生にはこころより感謝いたしております。

次に久米関係では、『微苦笑の人　久米正雄伝』小谷野敦　中央公論社　小谷野氏は、自分の書いた評伝の中ではこれが一番できがいいと思っているそうです（葉書）。久米の作品は、岩波文庫などである程度読めます。また、登録すれば国会図書館のデジタルコレクションでも両人の作品を読むことは可能です。なお、同じく国会図書館のデジタル版で読める菊池寛の『友と友の間』という小説があるんですが、それにはすごい書き込みがありまして、嘗て松岡派と久米派が図書館の本に書き込んだバトルがそのまま読めます。はた迷惑な話ですが、落書きで読者がけんかしてる訳です。

5　最後に祖父の代表作『法城を護る人々』の話に再度言及させて頂きますと、

『法城を護る人々』は一度 1980 年に復刊されておりまして、その際に作家の水上勉が帯を書いてくれています。資料６をご覧ください。読ませて頂きます。

さて、近年、オンラインゲーム「文豪とアルケミスト』が人気を博しておりまして、松岡譲の名前も久方ぶりに日の目をみております。このゲームには日本の多くの作家が登

場いたします。
実は本年度、『法城を護る人々』が40年振りに法蔵館から復刊されることとなりました。ここ何年か法蔵館の編集部に「文豪とアルケミスト」の人気キャラクターの一人である松岡譲の『法城を護る人々』は復刊されないのかという電話やメールが大分入ったようなんですね。ネットでの人気も此度の復刊につながったようです。なお、復刊版の『法城を護る人々』上巻の解説はわたくしが担当致しました。出版のあかつきには何処かで見かけましたら、お手に取って頂けますと非常に嬉しく思います。

では、いよいよ最後になりましたが、今回の機会を与えてくださった牛久市読書団体連合会元会長の佐々江健治様と、田村千智様をはじめとする牛久市立中央図書館の皆様に心より感謝申し上げまして今日の講演を終わりたいと思います。皆様ご清聴まことにありがとうございました。